

# 山と博物館

第45巻 第3号 2000年3月25日

市立大町山岳博物館



「月下山嶺」剣御前にて

撮影 大石 高志

## 光と月

武田 武

高校一年のとき、今でも続いている全校登山で蓮華岳に登った。記念すべき第一回の全校登山だった。六月というのに、半分雪に埋もれた大沢小屋の生活は、不便極まりなかったが、それさえ楽しかった。

針ノ木岳から蓮華岳に続く、まぶしく光る残雪の稜線は、少年の私の心をすっかり魅了した。この登山が、まさか私をヒマラヤをはじめ、世界の高峰にまで行かせ、今なお山登りを続ける人生の出発点になろうとは思ってもよらなかった。

魅せられた、光る雪稜のたまたまは半世紀を過ぎたいまも、鮮明に網膜と脳裏に焼きついている。長い山歩きを振り返ってみると、不思議に、山と光景がたくさん蘇ってくる。

「御来光」 山歩きははじめた頃、里では見ることのできない、高山での御来光の神秘にふれなんと、憑かれたように、いくつかの山に登った。頂で御来光に逢うために、夜半にカンテラとか、アセチレンガスを灯して歩いたこともよくあった。雨の日や霧のなかでも懐中電灯の光よりも速くまで照らしてくれるガス灯を愛用した。懐中電灯が、簡単に入手できない頃でもあったし、電池の寿命も、いまのリチウム電池と比較すると、極端に短かったり、高価なこともあり、なかなか買うことができなかった。アセチレンの独特な匂いと妖しげに揺れる光が懐かしい。

暗い、岩山を登っていくと、ときどき前を登って行く人の足元から、煙草に火を付けることができるかと思うような火花が散る。ナイゲル（戦前から昭和三〇年代前半まで一般に使用されていた、靴底や縁に鉄を打った登山靴）が岩に激しく当たり、小さな線香花火のような光を放つ。

高度を増して行くとともに、星の数もおおくなり輝きも増して大きくなる。星が手に届きそうなくらいに近付いてくる。東の空に一種異様な、よわい光の筋がはしる。間もなく御来光の瞬間かと胸がときめく。

自然の美象は、一刻の休みもなく移ろう。光は、競い合う山嶺の高い順に、頂から頂へそして彩りを変えながら、谷間へと落ちて行く。空の雲も呼応して、その美しき瞬間は、まさに息をのむ間もなく一刻一刻と変転してゆく。色即是空、空即是色とはまさにこのことだろうか。

「プロツケン山の妖怪」 初めてプロツケン（ドイツ中部、ハルツ山脈のプロツケン山に多く見られたことからこの名がついた）に会ったときの震えるような感動は、古い昔の事だけれど、忘れることの出来ない大切な美しい思い出のひとつである。

初秋の夕暮、槍ヶ岳山頂であった。遠く加賀の白山の方だろうか、赤い大きな太陽が沈む間際、反対側の霧の中に、不思議な幻影が浮かんでいる。手をうがせば美しい虹の輪が光背を頂いているようだ。山のもつ、不思議な光輝に、驚嘆と神秘感に打たれた。

(大町山岳博物館協議会会長)

# ニホンカモシカの呼び名と語源

## —百六十三種の分類—(完結編)①

北村 嘉 寶

本誌等(五巻第五号(一九八〇年)、第二六巻第八号(一九八一年))で、カモシカの呼び名、一〇二種の語源を、また第二七巻第五号で、続編として時代別の変遷というテーマで、通算一〇六種の呼び名を紹介した。今回は、その後収集したもの、既報の訂正、補遺、文献名、分布地域名等を加え、改めて完結編として一六三種の呼び名を紹介する。呼び名には二語形のものが多いので、分類に当たっては主語源と思われるものを関係項目に掲げた。

なお各項の末尾に記入した異名は、呼び名の分布県で、「一」は市・都・地方名・山岳名である。また、仔以外はすべて成獣の呼び名である。

### ◎語源による系統別の呼び名

#### 一、狩猟系統の呼び名

1、ダキホラカシ(ダキハラカス)  
ダキとは崖、ホラカシ(ス)とは落とすこととをいい、方言を組み合わせた隠語。かつてはカモシカ猟法のひとつとした、猟犬等を使って崖の上に追い詰めると、カモシカは足を滑らせて転落死したのを捕らえていたことを語源としている。宮崎(西臼杵)  
①樋口信義『市房の自然』(自費出版、一九七八年)

#### 2、アイジン(アエジン)

アイ(アエ)とは雪崩のこと、雪崩に打ち倒された穴(カモシカ)をさす隠語。新潟(北蒲原)

②高橋文太郎『東日本に於ける狩猟者とその狩猟』(山岳)(日本山岳会、一九三七年)

#### 3、バイマタ

狩猟用語の組み合わせによるマタギ言葉。カモシカ猟の二方法。追い取りのボーイと、狩

猟を意味するマタギという言葉とを組み合わせて、ボーイマタギとし、それがボーイマタギ・バイマタに転訛したものと思われる。新潟(石船・北蒲原)  
文献②に同じ。

#### 4、クラマキ

クラ(岩場・岩壁)には、カモシカが多く集まるので、巻き狩り(四方から遠巻きにして獣を捕らえる方法)で捕らえたことから名付けたマタギ言葉である。  
地域(県)により二才仔や三才仔をいい、四年目のももクラマキと呼んでいる。

#### ◎成獣の新湯(岩船)・長野(大町)

③藤木九三・川崎隆章編『マタギ部落訪問』(登山全書Ⅱ)(一九五〇年)

#### ◎二才仔Ⅱ山形(西置賜)・新潟(石船)

文献②に同じ

#### ◎三才仔Ⅱ秋田(山本)・富山(中新川)

④『富山県史』民俗編(一九七三年)

#### ◎四年目Ⅱ長野(大町)

⑤千葉彬司『カモシカ』(山と博物館)(一九六九年)

注：一年目は仔でなく成獣とする。

#### 5、カングラ

カンは寒中の寒、クラは岩クラのクラで、カモシカを寒中に捕るので、両方を組み合わせてカンクラ・カングラと呼んだもの。カモシカの肉もカンクラという。群馬(利根)

⑥『町誌みなかみ』(町誌みなかみ編纂委員会編、一九六五年)

### 二、鼬系統・梅系統の呼び名

#### (一) 鼬系統

##### 6、カマシシ

上代の文献に初登場したわが国最初の呼び名で、当時毛皮の敷物を「毛席」と呼んでおり、よい敷物になるシシ(宍)の意で名付けたもの。長野(小県)・京都(船井)・三重(多気)

##### ⑦舎人親王撰『日本書紀』(七二〇年)

##### 7、カマシ

「カマシシ」あるいは「カマシカ」の下略称と考えられるが、かつての標準語である。分布地域を明記したものがないが、文献の時代性を考えると、京都を中心にしたある範囲であったと推定される。

##### ⑧深根輔仁『本草和名 下巻』(九一八年)

##### 8、カマシカ

「毛席」と鹿(カモシカを鹿の同類と考えた)とを組み合わせた呼び名で、近世の標準語のひとつである。一説によると、カモシカは鎌のようにうすく、やせて切り立った岩石のある峰に棲むことから、この名ありとされている。京都を中心に広まっていたと思われる。

##### ⑨人見必大『本朝食鑑』(二六九七年)

ここで、現代の標準語をなっているカモシカという呼称について述べておく。この呼称は、昭和九年に天然記念物、昭和三〇年に特別天然記念物に指定されて以来、全国的に定着してきた標準語である。カモシカという名称が、公文書に初めて採用されたのは、明治二五(一八九二)年に公布された「狩猟規則」(農商務省)である。

和名は「ニホンカモシカ」で通常、カモシカと言っているのは略称である。カモシカの語源は、毛が鼬になるシカというところからきている。

##### ⑩遠藤元理『本草辯疑』(二六一五年)

##### 9、カモ

カモシカの毛皮が鼬(敷物)になることからカモと呼んだのが、最初の語源であるが、近代になると(一)角の形状を鎌に見立てて名付けた「カマ」が「カモ」に訛つたものとするもの。(二)禁獣を食用にするため、鴨になぞらえたとするもの。(三)カモシカの下略称だとする諸説があるが、かつては標準語であった。埼玉(秩父)・神奈川(足柄上)・山梨(大月)・長野(岡谷)・京都(船井・北桑田)

##### ⑪安部真貞・出雲広真『大同類聚方』(八二七年)

##### 10、カモシシ

語意は毛皮が鼬になる宍である。今一つは、「カマシシ」が訛つて「カモシシ」に変わったとも考えられる。岐阜(大野・吉城)・長野(下伊那)

##### ⑫藤原時平撰録『延喜式』(九〇五年)・九二七年

##### 11、カモシ

カモシシの下略称または写本の折り、「シ」の一字が見落とされ、そのまま後世に伝えられたものと思われる。昭和三〇年代には大阪府下に残っていた方言である。

##### ⑬中村甚之照『和王編図彙叙』(一六九三年)

##### 12、ケラ(キラ)

祁良(糞)を毛皮で作っていたことから、里言葉(その地方の言葉)であるケラを、カモシカの呼び名に転用したマタギ言葉。一方、キラという呼び名は、ケラの「ケ」が、「キ」と発音されたものであるが、ケとキは力音で音通関係にある。ケラの方には、確かな語源もあり、またケラとキラの分布地方は同一ゆえ、ケラに含めた。

○ケラ：青森(西津軽・南津軽)・秋田(北

秋田・仙北)・岩手(和賀)・新潟(北蒲原)

⑭菅江真澄「布伝能麻途万瑣」『真澄遊覧記』(二八一年)

○キラ:秋田(北秋田・仙北)  
⑮早川孝太郎「阿仁マタギの山詞その他」『方言』(一九三七年)

13、ケラナ(ケナラ)

「ケラ」と同義語のマタギ言葉であり、ナを接尾語にしたマタギ独特の造語法のひとつである。なお、ケナラと報告した文献もあるが、誤植か、あるいはカラダ(体)のことをカダラと発音する類例もあるので、ケラナと同一に扱うことにした。秋田(北秋田・仙北・由利)・岩手(和賀)

⑯武藤鉄城「秋田のマタギに就て」『民俗学』(一九三三年)

14、ケラシシ

「ケラ」と、シシ(宍)とを組み合わせたマタギ言葉。青森・岩手

⑰山田九郎右衛門・千種儀左衛門「御領分産物」『享保・元文全国産物帳』(二七三五年)

15、アオケラ

地方によってケラは、糞のほか獲物や獣をいうが、毛皮を糞に利用していたマタギ達が、「アオ」と組み合わせて呼んだもの。因みに熊はクマケラと呼んでいる。秋田(北秋田・由利)・新潟(北蒲原)

文献⑯・⑰長尾宏也「山郷風物志9」(竹村書房、一九三二年)

16、コシマケ

カモシカの毛皮を、保温のため、体に纏ったことから、腰巻き コシマケと呼んだマタギ言葉であるが、福島県南会津地方では、カモシカの仔も、コシマケと呼んでいる。また、

熊の呼び名でもある。秋田(北秋田)・山形(西置賜)・宮城(白石)・福島(南会津)・新潟(北魚沼)

⑲笹村浩「南会津熊狩の話」『旅と伝記9』(6)(三三社、一九三六年)

⑳柳田国男「分類山村語彙」(信濃教育会、一九四一年)

(二) 褥系統

17、ニク

古くからカモシカの皮は、褥(敷物)として利用されていたことから生れた呼称で、当時の標準語である。近年になると、(1) 獣肉のニク。(2) 怒ったときの憎々しい面つき。(3) 捕獲したカモシカを売ると、二二分(二分分)の日当になることなどから名付けたとする説があるが、褥が元祖である。またニクの中にアクセントがあるのが、この呼び名の特徴である。ニク系統の呼び名は、アオ系統の呼び名と東西対立分布をしており、西日本(糸魚川と浜名湖を結ぶ線より西側)に広く分布している。静岡(周智)・山梨(南巨摩)・長野(上伊那・西筑摩・飯田・下高井・北安曇・諏訪)・石川(白山山系)・福井(敦賀)・滋賀(甲賀)・三重(三重・北牟婁・多気)・奈良(吉野)・和歌山(日高・東牟婁)・徳島(愛媛)・高知(中央山地)・福岡(旧上座郡)・宮崎(西臼杵・東臼杵・西諸県・東諸県)・大分(宮崎)・大分(大分)・傾山・祖母山)・熊本(八代)・岐阜(石津)

㉑土岐利綱編「家中竹馬記」(二五二年)

18、ニクシカ

毛皮が褥になる鹿という意の隠語。京都(船井・北桑田)・滋賀(高島)・富山(中新川)

㉒高橋文太郎「山岳語彙蒐集報告(一)」(一九三八年)

19、ニクシシ

褥(毛皮・敷物)になるシシという方言。富山(新川)・石川(石川)・福井(南条・立石半島)・岐阜(大野・吉城)・滋賀(高島)・宮崎(東臼杵・西臼杵・東諸県・西諸県)

㉓「美濃国内産物」『加越能三洲郡方産物帳』(二七〇〇年代)

20、ニクノシシ

ニクシシと同義語で、かつては方言であったが、近年では隠語の性格が強い。岐阜(群上・益田)・宮崎(東臼杵)・大分(宮崎)・祖母山・傾山) 文献⑳に同じ。

三、宍・肉系統の呼び名

21、シシ

古くから食用になる獣は、宍あるいは肉として呼ばれてきたが、カモシカも食肉獣ゆえ、シシと言われていた。地域によって方言または、マタギ語となっている。秋田(北秋田・仙北・鹿角)・岩手(岩手)・宮城(名取・白石)・福島(南会津)・新潟(北魚沼)・富山(中新川)・長野(西筑摩)・岐阜(大野・吉城)

㉔大伴家持「万葉集」(七五九年以降)

22、ニクボーズ(ニクボウズ)

肉がうまい坊やという意の隠語(愛称)。宮崎(西臼杵)

語源は藤岡吉照氏の書簡による。

23、ニクメ

ニクの呼び名に、接尾語の【メ】をつけて、ニクメと呼んだ隠語(蔑称)。地方によっては動物名にメをつけて、牛メ、馬メ、蛇メ、鳥メなどと呼んでいる所がある。石川(石川) 語源は石川県白峰村公民館長書簡による。文

献は㉔に同じ。

24、ニクバカ

熊や鹿など他の獣に比べて、はるかに捕らえやすい、馬鹿な獣(宍・肉)という意の隠語(蔑称)である。大分(南海部)

㉕千葉徳爾「狩猟伝承研究」(風間書房、一九六九年)

25、ニクンボウ(ニクンボー)

「ニクボウズ」と同義語で隠語(愛称)。宮崎(南諸県) ㉖黒木一男「宮崎カモシカ調査」『VUL P. S. VOL. 1 (3・4)』(九州野生動物研究会、一九七四年)

四、生息場所系統の呼び名

(一) 壁系統

26、カベ

カベとは、山が塀のように殆んど直立した絶壁状態の場所をいうが、カモシカはこのような場所に棲むので、最初からカベと呼んだ地域と、カベシシのシシを省略してシシと呼んだ地域とがある。岩手(南部地方)・岐阜(大野・吉城)

㉗屋代弘賢「古今要覧編」(二八二一〜八四二年)

27、カベシシ

「カベ」と同義語で、カベに棲むシシという方言。富山(南砺波)・岐阜(大野)・石川(石川・美能)・福井(立石半島)

㉘川口孫治郎「飛騨の白川村」(往「」書店、一九三四年)

28、カベトリ

カベ(岩壁)に棲み、岩場を鳥のように身軽に跳ぶことから名付けた方言。岩手(南部地方)・岐阜(大野・吉城)

㉙小野職博ほか「観文獻譜」(二八〇七年)

(二)倉系統

29、クラ  
カモシカは、屹立している岩場や鞍部(峯つづきの低い所)などに棲んでいること、また皮が馬の鞍敷(付属品)に使っていることなどから呼んだマタギ言葉である。福島・群馬(利根)・長野(上水内)  
文献②に同じ。

30、ヒクラシシ  
ヒクラ(岩壁)に棲むシシの意で方言。岐阜(大野・吉城)  
文献②に同じ。

31、クラシシ  
クラを巻いて走るシシという意のほか、ヒクラシシ→クラシシとして残った方言。山形(西置賜)・福島(南会津)・群馬(利根)・栃木(日光・奈須・塩谷)・新潟(岩船・耶摩・北魚沼・中蒲原)・山梨・長野(上伊那・下伊那・大町・西筑摩・南安曇・北安曇・上水内・下高井)・富山(立山)・岐阜(揖斐・恵那・大野・吉城)・石川(石川)・福井(大野)・三重(飯南)・奈良(吉野)・和歌山(紀北地方)・愛媛(石槌山)・徳島

32、クラシシ  
クラシシ・クラシカの下省略で方言。福島・群馬(利根)・長野(西筑摩)

33、クラシカ  
クラに棲んでいるシカの意の方言で、イウシカと同義語である。群馬(利根)・長野(上伊那)

34、クラシカ  
クラに棲んでいるシカの意の方言で、イウシカと同義語である。群馬(利根)・長野(上伊那)

一九四〇年

34、クラシカ  
ドは漢字で驚、愚かとか、にぶいといった意味があり、クラに在る愚かなケモノという意の隠語。クラとドの間に「シ」を入れたのは、語呂の関係であろう。岐阜(吉城)  
③「上宝村誌」(岐阜県吉城郡上宝村、一九四三年)

35、クラタチ  
マタギ言葉で「二才仔をいう。カモシカの仔は親離れして独立すると、しばしば岩クラの上に立って、凝視姿勢をとることが多いので、クラ立ちと呼んだもの。青森(下北)  
④「下北半島のニホンカモシカ」(下北半島ニホンカモシカ調査会、一九八〇年)

36、クランボウ(クランボー)  
クラに在る愛嬌のある可愛い奴という意の隠語(愛称)。ボウ(ボー)は酔坊、客坊などの接尾語で、クラと組み合わせるとクランボーとして、それがクランボウ(ボー)となったもの。栃木(日光地方)・長野(岡谷・茅野・諏訪)・岐阜(恵那)  
⑤町田立穂「又鬼部落の熊狩り」(全猟112・3)(全日本狩猟倶楽部、一九三六年)

37、クラップー  
クラと、奴という意のプーとを組み合わせた方言で、クラに在る奴という意味の呼び名である。群馬県水上町藤原地域では、土質の悪い土地のことを野プー、大うそつきや、大法螺吹きのことを野テップーなどといひ、プーは奴とか、ものをさす方言となつていふ。群馬(利根)

38、クラップー  
「クラップー」に、指小辞のコをつけた隠語(愛称)。新潟(北魚沼)  
文献②に同じ。

38、クラップー

39、クラッポ  
クラと、ポ(棲むもの、醜いもの)の意とを組み合わせ、岩場で棲んでいるものという意の隠語。福島(南会津)  
⑦「南会津南郷の民俗」(会津民俗研究会、一九七一年)

40、ヤマシシ  
山に棲んでいる穴という意で、古代の標準語のひとつ。分布地域は当時の都、奈良を中心に広まっていたと思われるが、今日では長野県に残っているだけである。長野(小県・上田)・奈良  
文献⑦に同じ。

41、ヤマシシ  
「ヤマシシ」と同義語で、奈良時代の標準語。茨城  
⑧「常陸国風土記」(七二〇年以降)

42、ヤマヒツジ  
「山羊」の訓読みでヤマヒツジ、山に在る羊によく似た獣の意で、標準語。近世の文献に出現するが、分布地域は明らかではない。  
⑨林道春「改正増補多識編」(一六三〇年)

43、ヤマニク  
山内の意と考えられる隠語である。奈良(吉野)  
⑩「総合日本民俗語彙」(民俗学研究所、一九五五―一九五六年)

山の牛と名付けた隠語。三重(熊野) 辻本力太郎氏より聴取。

44、ヤマノウシ  
牛に比べ小型であるが、角が似ているので、

45、ヤマウシ  
山に放し飼いにしている牛に似た獣という意の隠語。富山(南砺波)  
⑪種田重平「羚羊考」(高志人社、一九六二年)

46、サンヨウ  
「山羊」の音よみによる呼び名であるが、分布地域は不明である。深根輔仁「大和本草(下)」(一九一八年)によると、「零羊角 山羊」と記録しているが、振り仮名がないので呼び方は定かではないが二応、呼び名として記録する。

47、ゴートンガリ  
生息場所をいうゴートラ及びトンガリとを組み合わせたマタギ言葉で、ゴートラとは岩のゴロゴロした場所をいい、トンガリは突んがり、山の険しさを意味している。新潟(中蒲原)  
⑫笠原藤七「川内山とその周辺」(自費出版、一九六五年)

48、ゴートラ  
「ゴートンガリ」の下略称で、マタギ言葉となっている。新潟(中蒲原)  
文献⑫に同じ。

山と博物館 第45巻第3号  
発行 二〇〇〇年三月二十五日発行  
発行 長野県大町市大字大町八〇五六―一  
市立大町山岳博物館  
TEL 〇二六―一三三三〇二一  
FAX 〇二六―一三三三三三三  
印刷 奥村印刷  
定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不要)  
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七―一三三九三